Meisei University

「どちりな・きりしたん」の送り仮名（上）

柴田雅生*

On the *Kana* letters immediately after the related *Kanji* characters in *Doctrina Christan* (1). SHIBATA Masao

一　はじめに

現存するキリシタン資料の中で「どちりな・きりしたん」は、複数の版を今に伝える点で他にはない特徴を有するものと言える。複数の版とは、すなわち前期版と後期版、およびそれぞれのローマ字本と国字本であり、特に**表一**に記す四本が知られている。このほかにも、体裁を異にする水府明徳会蔵の写本（仮題『吉利支丹心得書』）と、高槻・中谷家に伝わる①の写本がある。前期版①②と後期版③④が存するのは、「どちりな・きりしたん」がキリシタン宣教師の布教に欠かせない手引きの書であったからであり、サビエル以降絶えず必要な改訂と補充を行ってきたことの表れである。ローマ字本②④と国字本①③をともに有するのは、宣教師と日本人信者が同時にテキストをよむためであり、ローマ字本と国字本との間には小さな差異はあるものの、ほぼ同一の内容であることは、国字本のよみを確定する上でも有効である。

ところで、キリシタン資料の研究の中心はこれまでどちらかというと、『天草版伊曾保物語』や『天草版平家物語』、『日葡辞書』、ロドリゲス『日本大文典』などのローマ字資料にあったと言えるだろう。『天草版伊曾保物語』他のローマ字による日本語の表記は音韻史の重要な資料として、『日葡辞書』やロドリゲスの『日本大文典』は語彙や文法観の貴重な資料として、中世後期の日本語の解明に大きな貢献をなしてきた。ま

表一　「どちりな・きりしたん」諸本(1)

書名	刊行年	刊行地	所蔵	活字
①どちりいなきりしたん	一五九一	加津佐刊	バチカン図書館蔵	平仮名大文字
②Doctrina Christan	一五九二	天草刊	東洋文庫蔵	ローマ字
③どちりなきりしたん	一六〇〇	長崎刊	カサナテンセ文庫蔵	平仮名小文字（後藤版）
④Doctrina Christan	一六〇〇	長崎刊	水府明徳会蔵	ローマ字

NII-Electronic Library Service

Meisei University

た、この期の国内資料である狂言や抄物などと照らし合わせることにより多様な視点の設定を可能にし、他の時期に比して日本語の詳細な実態を浮かび上がらせてきた。また、版本だけでなく写本等との比較対照により、その用語や編集のあり方などについても研究が進められるようになってきた。

一方、キリシタン資料の約半数を占める国字本については、『落葉集』や『こんてむつすむん地』などについては研究があるが、相対的にさほど研究は進んでいない状況にある。しかし、ローマ字本が主として語学書であって、外国人宣教師用に編まれたものであるのに対して、国字本には日本人向けの宗教書が多いのは、言い換えれば、それまで日本人が自身のために作成していた書物とは異なり、一旦外国人の手を通して日本人向けに作成された書物ならではの何かが期待できるとも言えるではないか。日本人自身のためであれば意識せずともよい要素が、意識せざるを得ないこととなる可能性が考えられるからである。特に、ローマ字本がそのローマ字という表記形態故に音韻史の資料として重宝されたのであれば、国字本は日本語表記の資料として、他の所謂国内資料と比することを考える必要があると考える。

そこで本稿では、「どちりな・きりしたん」の国字本の表記に焦点を当て、特に送り仮名についていささか考えてみようと思う。送り仮名とは一般に、「語を漢字と仮名を使って表記する際、語（複合語の場合は各複合要素）の末尾の部分を仮名で表す場合の、その仮名」[2]とされる。これまでの送り仮名研究ではいくらかなりとも現今の送り仮名とは異なる様相が指摘されているが[3]、意外なことに、キリシタン資料についてはほとんど言及されていないようである。キリシタンの宣教師たちが「送り仮名」についての多少の認識があったことは次の記述からも知れるけれども、「捨て仮名」の用例である。

○この品詞は、あらゆる品詞に属し且あらゆる品詞に接続するので、他の如何なる品詞よりも拡がる傾向を持ってゐる。又既に述べたやうに、日本人は「てには」（Tenifa）とか「てにをは」（Tenivofa）とかいふ語の下に、あらゆる種類の助辞、名詞の格を示す格辞、動詞の法と時のすべてにわたる活用語尾を包括するのである。即ち、日本の書き方によれば、名詞又は動詞の一つ一つの意味を表す象形字の一字一字を書き、その名詞の立ってゐる格とか、動詞の取ってゐる時とか法とかを示す為にはその文字に「片仮名」（Catacana）か「仮名」（Cana）かを添へて書くのであって、名詞であれば、格辞のVa（は）、No（の）、Ga（が）、Vo（を）、Ni（に）、Nite（にて）、Toxite（として）等を書き、動詞であれば、動詞の音節や活用語尾、即ちRu（る）、reba（れば）、raba（らば）、To（と）、Zu（ず）、Zaru（ざる）等を書き、その他の助辞に就いても同じく書き添へる。

○このやうに漢字に更に書き添へる格辞とか活用語尾とかを「てには」（Tenifa）、「てにをは」（Tenivofa）、「捨仮名」（Sutegana）、「置字」（Voquiji）等と呼ぶ。（下略）

（ロドリゲス『日本大文典』[4]）

この他にも三箇所に「捨て仮名」という語句が用いられていて、「送り仮名」の用例は見られない。菊池圭介氏が指摘されるように[5]、「送り仮名」の語の最も古い用例は『言塵集』であり、「捨て仮名」の最古の用例がロドリゲス『日本大文典』である。何故ロドリゲスが「送り仮名」の語を採らなかったのかは不明であるが、当時の他資料に現れる「送り仮名」の語の意味とは異なり、むしろ訓点を指し示すかのような用法は

NII-Electronic Library Service

Meisei University

他にはほとんど見られない特異なものではある。しかしながら、活用語尾や転成名詞ほかの用法を含むものであることから、以下に考察する対象の認識は一応はあったと言えるであろう。本稿ではその実態について、具体的な資料に「どちりな・きりしたん」を取り上げて検討しようと思う。

なお、調査には勉誠社文庫の影印（55・56）を用い、小島幸枝編『校本どちりなきりしたん』（一九六六年一月、福井国語学グループ）や日本古典全書『吉利支丹文学集 下』（一九六〇年一月、朝日新聞社）、亀井孝・H・チースリク・小島幸枝『日本イエズス会版 キリシタン要理』（一九八三年一一月、岩波書店）を参照した。また、引用に際しては適宜句読点や濁点を加えて示した。後期版に見られる振り仮名はそのまま残し、新たに加えることはしなかった。

二 「どちりな・きりしたん」の使用文字

まず初めに、「どちりな・きりしたん」の表記面の全体像を把握しておこうと思う。漢字については小島幸枝氏の研究[6]があるが、漢字単独の調査であり、仮名などとも併せて見ておく必要があろう。全体の統計を表二・三に示す。

前期版と後期版の表記の違いについては、次のような言及がよくなされる。

しかし、前期版と後期版とを比較してみると、国字活字が稚拙なものから精巧なものへと著しく進歩しているばかりでなく、後期版では表現や内容の上に多くの改訂が施されている。まず漢字・仮名の表記の点では、大衆向きとして漢字をなるべく避けて仮名書きの方針を打出している。（下略）[7]

表二 文字種

	漢字	仮名	記号	合計
前期版	八〇〇九（二三・三%）	二五八九四（七五・四%）	四三九（一・三%）	三四三四二（一〇〇%）
後期版	五〇一五（一〇・一%）	四三五四一（八八・一%）	八六八（一・八%）	四九四二四（一〇〇%）

表三 記号の詳細

	々	ゝ・ゞ	〳〵・〴〵	○	ヶ	・	中	ゟ	お	ぉ	文	合計
前期版	四一	一九八	三二	八九	二六		五三					四三九
後期版	一七	三七〇	九二	六四	二	三		九七	四	二一五	七	八七一

NII-Electronic Library Service

Meisei University

確かに前期版は後期版の二倍の漢字比率である。それもふりがな無しによるものであり、後期版の表記に対する統一的で行き届いた配慮が窺われるものである。これは、後期版が長崎の後藤登明宗印に商業出版を依頼したものであり、初学の読者に対する表記上の配慮がより行き届いた結果だと言える。

仮名については、『ばうちずもの授けやう』を中心とした新井トシ氏の詳細な調査[8]がある。「どちりな・きりしたん」の中には「あ・阿」や「し・志」のように複数の字母をもつものも見られるという。

記号に関しては、前期版では「ぜすきりしと・でうす・きりしと」を用いるのに対して、後期版ではそれぞれ「ゑ・お・ぉ・ゟ」を用いる。ただし、前期版ではぜすきりしとの前に「中」を記し、目印としていると考えられる。「〇」は、前期版・後期版ともに、

是を経もんの唱へには〇何の名なり共付て後中ゑご〇て〇ばうちいぞ〇いんのうみね〇はあちりす〇ゑつ〇ひいりい〇ゑつ〇すひりつす〇さんち〇あめんと云也。　（前期版六一オ）

〇てよろがれすのびるつうですといふ三の善（ぜん）あり。（中略）〇かるぢなれすのびるつうですといふ四の善あり。　（後期版五四オ）

などと、祈禱文や箇条書きの部分に見られる。後期版では、後半部分に偏るけれども、「・」も三箇所用いられている。なお、「ヶ」は、

弟　けれどにこもるひいですのあるちいごは何ヶ条ぞ（前期版二六ウ）

師　十かでうあり。これすなはち二にわくる也。はじめの三ヶ条（でう）は御主（あるじ）ぉにたいし奉りてつとむべきみちををしへ、いま七かでうは人にたいしてのみちををしふる者也（後期版二七オ）。

などと「条」字を下接する場合にのみ使われる。「でう」と仮名書きされる場合には、後者の引用中に二箇所見られるように「ヶ」ではなく「か」と仮名書きされる。

前期版と後期版を比較すると、確かに後期版の方が表記に対する配慮がより一層増していると考えられるが、「中」の使用などに見られるように、前期版においても程度の差こそあれ認められるものである。少なくとも出版という形態をとる以上は、そしてそれまでに西欧における出版の経験をもつ者であれば、どんな出版物であっても相応の注意を払って作成したであろうことは想像に難くない。それが、布教活動の中心を占める教理書であればなおさらである。それが、同時代の他資料とどのような関係にあるかが問題である。次節からは具体的な送り仮名の実態を見て行くこととする

三　前期版『どちりいなきりしたん』の送り仮名の実態

これまで指摘されている送り仮名を規定する条件を示すと、

a　活用形による違い[9]

b　漢字が担う音節数[10]

となる。aについては多用される活用形（連用形）においては活用語尾を送らない傾向が指摘され、bについては一漢字につき二音節となる傾向があるという。異なる論理によるものであるため、両者が重なりあう可能性も高いが、その場合においても優先順位というものを想定できるかもしれない。例えば、多用される動詞「いふ（云）」については次の如くである。

いふ（云）　122

未然形　云（い）はず1／云（い）はん2

NII-Electronic Library Service

Meisei University

連用形　云（いひ）かくる1／云（いひ）き2
終止形　云（いふ）1／云（いふ）べし5
連体形　云（いふ）＋体言43／云（い）ふ也1・云（いふ）也9／云（いふ）か3／云（いふ）ぞ4／云（いふ）共4・云（いふ）とも8／云（いふ）に7／云（いふ）は9
已然形　云（い）へり5・云（いへ）り1／云（い）へども9・云（い）へ共10／云（いへ）ば1

活用語尾を示すのは未然形と已然形に偏る傾向が見て取れる。已然形の「云（いへ）ば」一例は九オに見られるものである。前期版のローマ字本では「iyeba」とあるが、後期版では「iuaba」（国字本は「いはゞ」）である。「云（いへ）り」一例は三六ウに見え、この二例と未然形三例の計五例を除けばすべて「云」字は二音節に相当する。このことからすれば、活用形による別が優先されているとも思われるが、漢字が担う音節数にも一定の蓋然性が認められる。また、「たまふ（給・玉）」は次の通り（ただし、「うけ給はる」2例は除く）。

たまふ（給・玉）
未然形　給（たま）はず10／給（たま）はん16
連用形　給（たま）ひ（連用中止）31／給（たま）ひき3／給（たま）ひぬ2／給（たま）ひて12
終止形　玉（たま）ふ5／玉（たま）ふべし9／玉（たま）ふまじ1
連体形　給（たま）ふ＋体言1・玉（たま）ふ＋体言128／玉（たま）ふ也17・玉（たま）ふなり1／玉（たま）ふごとし3／玉（たま）ふが2／玉（たま）ふぞ11／玉（たま）ふと29／玉（たま）ふに17／玉（たま）ふや2／玉（たま）ふを7
已然形　給（たま）へば9
命令形　給（たま）へ19

終止形・連体形に限定される「玉」字とそれ以外の「給」字の関係も興味深いが、いずれも漢字が二音節に相当する。それゆえに「玉」字が用いられたとも考えられる。三音節以上の動詞については別に考える必要もあろう。他についてはどうであろうか。以下に、少々長くなるが前期版『どちりいなきりしたん』の送り仮名の用例を示し、検討を加えることとする。なお、下接の活用語は終止形で示し、体言については一括した。

（以下、続く）

注

（1）『キリスト教歴史大事典』（一九八八年二月、教文館）、小島幸枝『キリシタン文献の国語学的研究』（一九九四年一月、武蔵野書院）の「総論」などを参照。
（2）佐藤喜代治ほか編『漢字百科大辞典』（一九九六年一月、明治書院）の「送り仮名」の項（安部清哉氏執筆）。
（3）原口裕「近代の送り仮名」（『漢字講座4　漢字と仮名』（一九八九年二月、明治書院）所収）、田島清司「近世語学書『かたこと』の表記法」（『九州大谷研究紀要』第八号、一九八一年一二月）、坂口至「近世初期の送り仮名――和泉流古狂言『和泉家古本』の場合――」（『国語国文学研究』第二五号、一九八九年九月）など。キリシタン資料に関しては、管見では、原口氏が『ぎやどぺかどる』について、「読者への配慮が十分に行きわた」り、「送り仮名は統一的で、よく送られている」と述べられている程度である。
（4）土井忠生訳『ロドリゲス日本大文典』（一九六五年三月、三省堂）五三二ページ。なお、引用に際しては原文横書きを縦書きに直し、記号等も適宜入れ換えた。
（5）「おくりがな」「すてがな」の語史」（『語文』第九四輯、一九九六年三月）。
（6）『校本どちりなきりしたん』（一九六六年一月、福井国語学グループ）の解題。
（7）『日本思想大系25　キリシタン書排耶書』（一九七〇年一〇月、岩波書店）所収の参

NII-Electronic Library Service

Meisei University

考「ドチリナ―キリシタン本文の異同」の解説による。

（8）「きりしたん版国字本の印行について（二）」（『ビブリア』第十号、一九五八年三月）。

（9）小久保崇明「千葉本系大鏡注釈数則」（『語文』第一四輯、一九六三年一月、後に『大鏡の語法の研究』（一九七六年一一月、桜楓社）に収録）など。

（10）池上禎造「表記の歴史から見た現代語表記法」（『講座日本語学6　現代表記との史的対照』（一九八二年五月、明治書院））など。

NII-Electronic Library Service